

## 消化器内科紹介

— 発足から現在までを振り返って —



副院長 水上 祐治

### 1. 発足

昭和59年は高度経済成長期で、日本人の平均年齢は約35歳でした。病院勤務医は皆若く、当時、宮田信潔院長（現理事長）は56歳、当院医師は全員それより若かったわけです。この年の4月、永頼会館1階会議室で医師着任式があり、宮田院長が浦岡正義先生（現勤務先：浦岡胃腸クリニック）を、素晴らしい消化器専門医に来ていただいた、と集まった職員の前で嬉しそうに紹介されました。ここに当院消化器内科がスタートしました。

私も当院で臨床修練をさせていただくことになり浦岡先生と一緒に赴任いたしました。柚木昌先生（岡山県、みわ記念病院）の協力も得て、院内での消化器内科の体制作りがスムーズになされました。浦岡先生は毎日の診療、病診連携、学会発表、論文作成に全力投球され、消化器外科大森克介先生と緊密に連携を取り合い、当院消化器内科のレベルをぐんと引き上げられました。

### 2. 展開

その後、小川泰史先生（瀬戸健診）、西村庸夫先生（広島県、西村内科）、更に大嶋完二先生（松山協和病院）に受け継がれ、患者さんが増え、また、多くの先生方が消化器内科で研修、研鑽されました。

県内在住の先生では、退職順に久保義一先生（愛媛病院）、有馬祥子先生（松山協和病院）、吉岡昌則先生（よしおか内科）、玉井正健先生（津島病院）、岡祐一郎先生（松山協和病院）、石川真紀先生（石川病院）、村上匡人先生（村上記念病院）、星加章雄先生（岩崎病院）、矢野春海先生（周桑病院）、眞柴寿枝先生（愛媛大学）、宮田朋史先生（松山リハビリテーション病院）、越智明子先生（大洲中央病院）、矢野哲郎先生（矢野内科クリニック）、古田聡先生（愛媛病院）、浦岡佳子先生（浦岡胃腸クリニック）、湯山晋先生（済生会今治病院）、古川淳先生（古川医院）、明坂和幸先生（県立中央病院）、小堀陽一郎先生（瀬戸内海病院）、吉田直彦先生（吉田病院）、岡本傳男先生（市立宇和島病院）、有光英治先生（愛媛大学）、藤澤友樹先生（周桑病院）達で、今はそれぞれの医療機関で活躍されています。

### 3. 現状

平成10年私は再び、当院に赴任することができ、それまでの先生方の作り上げた診療レベルの維持、発展に努めています。消化管、ERCP関連手技は水上、村上信三が主に担当し、肝臓、超音波関連手技は田中良憲、木阪吉保が主に担

当しておりますが、あまり細分化はせず、西山麻里、神野亜希子、中原弘雅、久米美沙紀、小川明子を含め全員で消化管、胆膵、肝臓の患者さんを受け持っています。

消化器領域においても医療の進歩は目覚ましく、抗癌剤をはじめ新規薬剤が次々と開発され、治療成績を上げています。また、狭帯域フィルタ内視鏡（NBI）拡大観察、内視鏡的粘膜下層剥離術、造影超音波、ラジオ波焼灼療法、内視鏡的胆管処置などは標準的手技となり、低侵襲である内科的治療に寄せられる期待は大きく、それらに習熟していることが患者さんへの適切な診療の前提となっています。医学、医療の進歩に目が離せません。当科ではほぼ毎日、カンファレンスで顔を合わせ、話し合い、ガイドラインに沿っているか、標準的治療になっているかなどお互いにチェックをしています。また、週一回のCancerBoardでは、病理医、外科医、放射線科医と一緒にそれぞれ専門の立場から多角的に意見交換し、治療方針を決めています。

院外の先生方とは15年前から年に4回勉強会（消化器画像診断勉強会、伊予消化器疾患勉強会）を持ち、一緒に症例検討、議論をしながら交流させていただいております。これからも専門性を高め、医療機器を整え、患者さん、開業の先生方のご要望に応えることができるようにしておきたいと思っています。

現在、日本人の平均年齢は約45歳とこの30年で10歳上昇し、落ち着いた社会になりました。当院でも昭和59年に比べ臨床経験豊かな医師が増え、私も当時の宮田院長の年齢を超えました。一方で、若い医師も増え、経験を通じて年々頼もしくなっています。熟練した医師集団による配慮の行き届いた、きめ細かな医療の中に、若い力を取り入れ、これからも地域医療に貢献していきたいと思っています。

今後ともよろしく願い申し上げます。



前列左より：  
木阪吉保、水上祐治、村上信三、田中良憲

後列左より：  
西山麻里、小川明子、神野亜希子、久米美沙紀、中原弘雅